

Architectonic Materialism: A House of Luxury 2

成熟時代の新たな建築理論を考える

建築史系スタジオ課題

古代から19世紀に至るまで、歴史上の建築家と建築理論が創り上げてきたのは、社会の上層の人々のためのLuxuryと呼ぶべき建築であった。18世紀末の市民革命は、君主を中心とする「旧体制」から市民を中心とする「新体制」への転換をもたらした。それとともに建築の世界には「公共建築」と呼ばれる新しいビルディングタイプが登場することになったが、建築家たちはリヴァイヴァリズムの手法を用いることによって、前近代のLuxuryな建築との結びつきを実現したのだった。

それに対して、20世紀のモダニズム理論は、歴史上初めて社会の下層半分に光を当てた。19世紀の都市化とともにスラムと呼ばれる地区が形成されたが、その住環境は最悪なものであった。モダニズムは、下層社会の人々の住環境を、最小限の空間のなかに光と風と機能性を導入することで改善したばかりか、そこに新たな建築理論と建築美学を生み出したといえる。

さらにいえば、20世紀は成長の時代であった。20世紀初頭のモダニズムは下層社会に光を当てたが、その階層の人々は、社会全体の成長とともに「総中流」階級へと底上げされていったのである。結果としてモダニズムは、20世紀のほとんど社会全体をターゲットとする建築理論としての立場を不動のものとしたのだった。

しかし21世紀の社会は、成長のフェーズから成熟のフェーズへと遷移している。社会はふたたび、上層と下層とに、分離されつつあるようだ。建築界においても、大手ゼネコンや大手組織設計の仕事と、小規模なアトリエ系建築家の仕事が、くっきりと分離をはじめてるように思われる。「建築家」の作品は、ますますローコストで最小限へと向かっているようだ。

だが、成長時代の20世紀のモダニズムがターゲットとした下層の労働者階級が総中流へと底上げされたのとは異なり、この先ローコストと最小限の理論を考え続けても、それはますます、建築家のパイを小さくするばかりではなかろうか。必要なのは改めてLuxuryの理論を構築することである。だがそれは表層的で皮相的なLuxuryではないはずだ。理論的には本質的で批判的なLuxuryを考え、物質的には表層に留まらない構築的なLuxuryを考えて欲しい。

スタジオ前半のリサーチ

▶参考図書の分担講読

- B. Brownell, *Material Strategies: Innovative Applications in Architecture*, Princeton Architectural Press, 2012
- Mineral, Concrete, Wood, Metal, Glass, Plasticの章を分担

▶Luxuryの建築リサーチ

- 「素材・構築」の観点から、Luxuryを実現していると思う建築事例をリサーチ
- 中間までに「Luxury」を模型ないし図面で表現する

スタジオ・エスキス

- 中間講評までは火曜・木曜に実施
- スケジュールはスタジオ内で提示します

スタジオ後半の住宅設計

- スタジオ内で提示する敷地候補・家族構成・職業などを用いて、200m²以内の住宅を設計する
- 5月10日（火）の午後に敷地候補（住宅）の見学会を実施予定

履修条件

学部生のみ（定員4～5名程度）

指導メンバー

加藤耕一 +

橋本吉史・倉田慧一（TA・加藤研博士課程）

